

アフター・ウェディング

2007(平成19)年11月14日鑑賞<GAGA 試写室>

★★★★★



監督＝スサンネ・ピア／出演＝マッツ・ミケルセン／ロルフ・ラッセゴード／シセ・バベツト・クヌッセン／スティーネ・フィッシャー・クリステンセン／クリスチャン・タフドルップ（シネカノン配給／2006年デンマーク映画／119分）

第1章

映画は監督で観る！

……デンマークにすごい女性監督を発見！ 人間描写の深さと独特の映像美は特筆モノで、韓国のキム・ギドク監督を知った時と同じような衝撃が……。インドで孤児たちの援助活動に従事する理想主義者と、デンマークの大実業家との間に一体どんな物語が……。また、育ての父と実の父をめぐって娘や妻たちの間に生まれた確執は……。島国ニッポンを脱却し、こんな広い視野で世界と人間を見つめなくては……。『邦画バブル』との警告を真剣に考えながら、たまにはこんな重いけれども、すばらしい映画を是非！



すごいデンマークの女性監督を発見！

『アフター・ウェディング』は2007年度アカデミー賞外国語映画賞にノミネートされたとのことだが、この映画を監督したのは1960年生まれのデンマークの女性監督スサンネ・ピア。彼女の作品は、1991年の長編デビュー作をはじめとしてこれまでに多くの賞を受賞しているうえ、ある作品は1999年にデンマーク映画史上観客動員数歴代5位になったとのこと。とはいっても、デンマークの人口は約550万人で、人口約2300万人の台湾の4分の1だから、第5位といってもその観客動員数は90万人とのこと。しかし、それでも6人に1人が観たというのだからすごい……。

同じ日に続けて観た『ある愛の風景』（04年）もデンマークでの大ヒット（43万人以上の動員）の他、国外でも高い評価を受けて注目されていたが、この『アフター・ウェディング』でアカデミー賞外国語映画賞ノミネートされたことによって、一躍その名を世界中に知らしめたとのこと。

もちろん、私がそんなスサンネ・ピア監督の作品を観たのは今回がはじめて。その

感想は、とにかく衝撃的！ やはり世界は広い。デンマークにこんな才能をもった若い女性監督がいたことにビックリ！

なぜデンマーク人がインドへ……？

この映画の一方の主人公であるデンマーク人の男ヤコブ（マッツ・ミケルセン）は今、インドで孤児たちの救助活動に従事中。食事、ベッド、教育、医療等々やるべきことは山ほどあるが、いくら頑張っても路上で生活している子どもたちのごく一部を救助しているだけ。他方、いくら理想に燃えてそんな慈善事業を展開しても、常に資金不足状態でこのままではヤコブたちが運営している孤児院やキャンプも撤退、解散の憂き目をみることになるそう。

デンマーク人の女性監督スサンネ・ピアの『アフター・ウェディング』はそんなストーリーから始まっていくが、ここで私が思ったのは、なぜ遠く離れたデンマーク人のヤコブがインドでそんな活動をしているの、ということ。逆に言えば、もっと近い日本人は一体どれくらいヤコブと同じような活動をしているの、ということ。日本人は島国ニッポンを脱却し、もっと国際的視野を広げる必要があるのでは……？

なぜヨルゲンはこんな申し出を……？

そんな悩みを抱えながら活動しているヤコブの元にある日届いたのは、デンマーク人の実業家ヨルゲン（ロルフ・ラッセゴード）から巨額の寄付をするという申し出。それは一体なぜ……？

もっとも、この寄付には1つだけ条件がついていた。それは、デンマークで直接会って話をするということ。現場での日々の活動に追われているヤコブは「とても行けない！」と抵抗したが、財政担当者からの「選択の余地はないワ」との説得によって渋々と故郷のデンマークへ……。

こりゃ何かウラが……？

用意されていたえらく立派なホテルに入って身なりを整えた後、ヨルゲンのオフィスで面会したヤコブはビデオを見せながら一生懸命に援助の必要性をアピールしたが、ヨルゲンはその内容にはあまり興味なさそうで、「よく検討する」というだけの返事。そして今日の面談はこれでおしまいときた。ところがそこで彼は、「明日はヒマだろ

う。娘の結婚式に是非出席してくれ」となぜかトンチンカンかつ強引な勧誘を……？
「こりゃ何かウラがありそう」。ヤコブがそう思ったのは当然だが……。

こんな緊迫した結婚式ははじめて……

スサンネ・ピア監督は社会派からミステリーまで何でもこなせるのではないかと思わせたのが、結婚式のシーンの緊迫感。神父の前でキスを交わす新郎クリスチャン（クリスチャン・タフドルップ）と新婦アナ（スティーネ・フィッシャー・クリステンセン）、そしてそれを最前列でやさしく見守る父ヨルゲンと母ヘレネ（シセ・バベット・クヌッセン）。こんな姿はどこでも同じだが、式場に駆けつけてきたヤコブはヘレネの横顔を見た途端目がテンに……。その視線を感じたのか、ヘレネも後ろを振り向き、ヤコブの顔を見た途端、みるみる表情が変わっていった。こりゃ一体ナニ……？ 2人には一体どんな関係が……？

結婚式の後はパーティーだが、デンマークでは日本的な形式張ったあいさつはなく、スピーチも原稿なしの自由スタイル。新郎のスピーチも堂々としたものだったが、自分でも異例だと言いつつ立ち上がった新婦アナのスピーチは、出席者を驚かせる大胆なもの。それは、「私のパパは血のつながりのないパパだ。それでも私は心からパパを愛している」というもの。それを聞いていたヤコブは、ひょっとしてアナは……？ いや、まちがいにアナは……？ と考え、頭が混乱していったのは当然。

ところで、これはすべてヨルゲンの計算づくの演出……？ それとも、とんだハプニング……？ そんな疑問を軸として、いよいよタイトルどおりの「アフター・ウェディング」のドラマが大展開していくことに……。

スサンネ・ピア監督の映像のすばらしさは……？

韓国のキム・ギドク監督の映画を観たときは、その映像の美しさとセリフの極端な少なさに衝撃を受けたが、デンマークの女性監督スサンネ・ピアの『アフター・ウェディング』の映像の特徴（＝すばらしさ）の第1はクローズアップの多用。とくに俳優の目と口については、さまざまなケースで極端にクローズアップされているから、俳優は大変だが、それによる表現力はすごいものがある。また、11月9日に観た『未来予想図～ア・イ・シ・テルのサイン～』（07年）のようなくだらぬストーリーと、テレビ画面がそのまま大型スクリーンに移動しただけのくだらぬ映像を観た直

後だけに、こんな大胆なクローズアップを多用するスサンネ・ビア監督の力量に脱帽。そんな極端なシーンだけではなく、とにかくスサンネ・ビア監督の映像はアップが多いから、傍観者的に映像をながめることはできず、観客の心にドーンと映像が突きつけられてくるはず……？

第2にスサンネ・ビア監督の映像がすばらしいと思ったのは、わかりきったセリフを俳優に語らせて説明するのではなく、映像だけで観客にそのシーンの意味を理解させていること。これぞ映像！ これぞ映画！ と感心することしきり。

ヨルゲンは一体ナニを……？

パーティーの席におけるアナの大胆スピーチによって、ヤコブと共に観客には「アフター・ウェディング」の論点が明確に提示されることになる。もっともそこでわからないのは、①巨額の寄付の申し出、②ヤコブのデンマークへの招聘、③ヤコブの結婚式への出席を演出したヨルゲンの狙いが一体何かということ。アナは、既に妊娠していたヘレネがヨルゲンと結婚した後に生まれた娘だが、ヨルゲンとヘレネの間にはアナとは大きく年の離れた幼い双子の男の子がいた。ヨルゲンは事業にも意欲的だが家族も大切にす理想のパパで、すべてにおいて No Problem。しかるに今回はなぜこんな家族の絆にひびが入るようなことをあえてやったの……？ 観客の誰もがそう考えるはずだが、スサンネ・ビア監督はそのヒントを暗示するシーンをチラリと挿入しているから、それをお見逃しなく……。

論点 その1——ヤコブとヘレネの葛藤は……？

ヤコブが抱いた疑問（あるいは確信）をヤコブの腹一つにおさめていれば何の波風も立たないのだが、ヤコブの心境としてはそうはいかないはず。翌日、家族で結婚祝いの品を開けているところにヤコブが訪問してきたから大変。アナとクリスチャンを残してヤコブとヘレネそしてヨルゲンは食堂に入って話をしたが、そこで「俺の娘なのか？」「なぜ言わなかったのか？」と迫るヤコブとヘレネとの間で激論となったのは仕方ないところ。

「アフター・ウェディング」の第1の論点は、そんなヤコブとヘレネの葛藤。もしヨルゲンがこんな結果になることを予想してヤコブを結婚式に招待したとすれば、きっと後悔していると思うのだが、ヨルゲンのポーカーフェイスからはその腹の中がな

かなか読みとれない。それも、スサンネ・ビア監督のストーリーづくりのうまさ……。

論点 その2 —— アナとヤコブの交流は……？

ヨルゲン家を異様かつ大きな嵐が襲う中、アナはすべてを知ることになる。すなわち、ヘレネがアナに語って聞かせたのは、ヤコブと別れてインドから帰国した直後に妊娠がわかったこと、ヤコブはインドで荒れた生活を送っていたため、探しても見つからず死亡したものと思っていたこと、という衝撃的な事実だった。そこで、アナはヘレネの制止を振り切ってホテルにいるヤコブの元へ。

さて、はじめて実の父、実の娘として対面したアナとヤコブの交流はいかに……？それが「アフター・ウェディング」の第2の論点。

論点 その3 —— ヨルゲンとヘレネ、アナの葛藤は……？

ヘレネにしてみれば、なぜヨルゲンがヤコブを呼びよせたのか？ そんなしょうもないことをしなければみんな幸せなのに、と考えたはず。ヘレネ自身が、昔の男であるヤコブのことを忘れられないのなら話は別だが、今は完全に忘れてしまっていたのだから。そこで生まれてくるヨルゲンとヘレネとの葛藤は……？

他方、アナは実の父親がどんな人なのか？ 自分の母親とどんな関係だったのか？ なぜ今まで自分の前に現れなかったのか、等々聞きたいことが山ほどあるはず。またそれを聞き、次第にヤコブに対して興味を示していくことはアナにとって楽しいことだったよう。またそれは、決して育ての父への愛や感謝の気持と矛盾するものではなかったよう……？ しかし、果たしてホントにそれだけ……？

したがって、「アフター・ウェディング」の第3の論点は、夫ヨルゲンと妻ヘレネ、父ヨルゲンと娘アナの間に生まれてくる（かもしれない）葛藤。

論点 その4 —— アナとクリスチャンの葛藤は……？

クリスチャンは、アナが結婚相手として選んでくれたことによってヨルゲンの壮大な事業の承継者になるわけだから、その前途は洋々。そんな風に思っていると、ベッドの中の睦言でアナは「インドへ行きましょう」などと、とんでもないことを……。

ヤコブと出会ってから、アナの頭の中はヤコブのことでいっぱい。新郎の俺のことなど全く考えていない、とクリスチャンがムクれたのは当然。そこで新婚早々クリス

チャンはキレかけたが、そのイライラのためか、アナとクリスチャンとの間には大きな亀裂が……？ そんなアナとクリスチャンの葛藤が「アフター・ウェディング」の第4の論点。

論点 その5——ヨルゲンとヤコブの葛藤は……？

「アフター・ウェディング」の第5のそして最大の論点は、巨額の寄付金の契約をめぐる攻防戦。「いろいろ考えたが……」と前置きしたうえ、インドへの帰国を決意したヤコブに対してヨルゲンが提案したのは、「1年ごとの寄付金ではなく、ヤコブとアナの名前をつけた120万ドルという巨大な基金を設立し、2人で使い途を決めればいい」というとてつもないもの。いかに資産家のヨルゲンといえども、120万ドルも支出すれば財産はゼロになってしまうもの……。驚いて、「あなたのメリットは？」と問い返すヤコブに対して、ヨルゲンはあっさりと「何もない。普通の暮らしができればいい」と回答したから、ヤコブの頭は混乱するばかり……。

もっとも、その場を離れたヤコブがホテルで契約書を確認すると、その中に「ヤコブがデンマークに住むこと」という条項を発見した。これはなぜ……？ インドとデンマークをかけもちではなぜダメなの……？ デンマークに住むことは契約の条件なの……？ ヤコブとヨルゲンの契約をめぐる議論は次第に熱を帯びていくことに……。

そして、あっと驚く新事実を前にして、ヤコブはついにある決断をすることになるのだが……。そんな「アフター・ウェディング」の第5かつ最大の論点をじっくりと味わいたいものだ。

あっと驚く新事実が……

邦画では、『世界の中心で、愛をさけぶ』（04年）、『いま、会いにゆきます』（04年）、『Dear Friends ディア フレンズ』（07年）、『Little DJ ～小さな恋の物語～』（07年）など、難病モノ映画のラインナップが定着した感があるが、11月10日に観た『象の背中』（07年）はそれとは路線を異にする難病モノ……？ そしてこの『アフター・ウェディング』は、難病モノの雰囲気は全くなかったが、実はヨルゲンは病に冒されており、モルヒネで痛みをごまかしているだけで余命いくばくもないという状況だった……。

映画の終盤に至って、そんなあっと驚く新事実が明らかになる中、以上述べた「ア



フター・ウェディング」の5つの論点はどのように展開していくのか、それがこの映画終盤の見どころだ。映画評論としては、ヨルゲンの病気のことをバラすのは禁じ手かもしれないが、私としてはギリギリここまででは仕方なしとして書いてきた。あとは皆さん自身がスクリーンでその後の展開を確認してもらいたいもの。

きっとあなたも、よくぞここまで深く人間描写を徹底したもの、またよくぞここまでミステリー色豊かに『アフター・ウェディング』のストーリーをつくりあげたものと感心するはず。なお、くどいようだが、映像美の特徴についても、しっかりあなたの目で確認を……。



同じ48歳……？

私はこの映画を観ている間、ヨルゲンは一体何歳なのだろうとずっと考えていた。日本人の年齢はわかりやすいが、外国人の年齢はなかなかわかりにくい。デップリと太った体形と巨額の金を動かしている大実業家という観点からは、60歳近くかなと思ったものの、ヘレネとの間にまだ小さい双子の男の子がいることを考えると、50歳以下とも思えてくる。

しかしてストーリー展開の中、彼は重大な病気を抱えており余命いくばくもないことが突然明らかになるとともに、わかったのは彼は48歳だということ。その瞬間私の頭にひらめいたのは、偶然の一致にすぎないとはいえ、肺ガンの告知を受け余命6カ月と宣告された『象の背中』の主人公も48歳だったということ。こんな風に働き盛りの48歳で死亡する男の例を2本も続けて観ると、48歳のあなたはよほど用心を……。

2007(平成19)年11月15日記